

嬾
髮
蛇
物
語



透 13
1298



全亭正直著

明治三十九年一月廿九日
水谷弓彦氏書贈

門表13
誦 1298
卷 1-5

嫩髻蛇物語

溪齋英泉畫

嫩髻蛇話說序



福之被福非幸而被也禍之被
 禍非孽而因也古曰福出者福
 反禍出者禍入所謂出乎女者
 反乎女者也吾竊怪昆蟲之微
 亦能禍福於人徵之古今徃々

有焉吁人雖靈乎不免為物所
禍福因此觀之報與因其不可
道者耶今此冊子應教如環復
因無端禍福之不可道了然可
知矣若夫加省察片言隻辭亦
為鑒戒苟以供展戲乎瞻章通

編徒為玩昊天網恢々疎而不
泄吾深慎禍福之所倚伏焉

嘗

天保庚寅涂月改元之日

東都麻丘 全亭主人題





嫩髻蛇物語總目錄

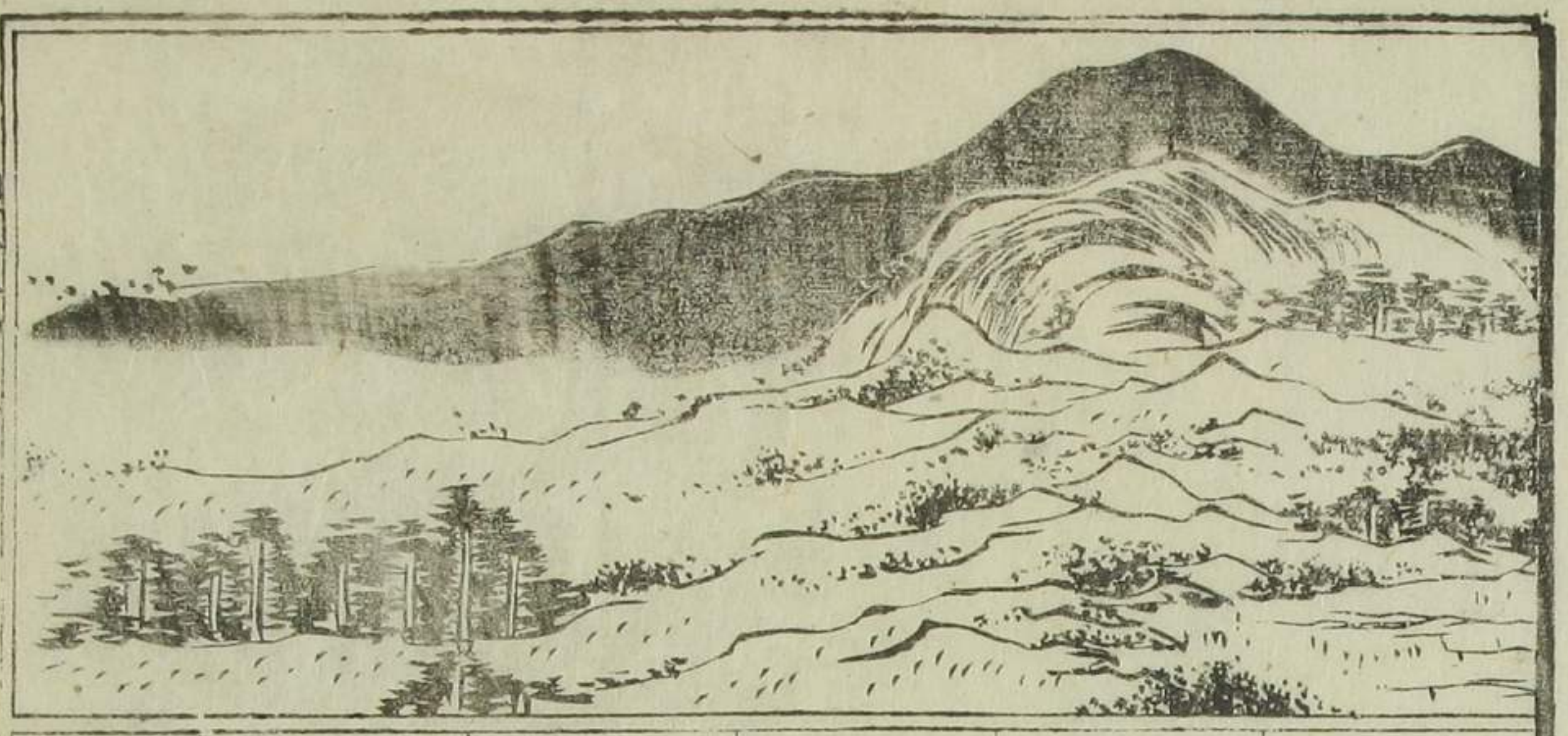
第一回 奥庭の賭弓
神垣の正夢

第二回 古郷の侘住
雪夜の迷児

第三回 老人の竹杖
在世の面影

第四回 隱家の山の井
形見の蛇丸

第五回 妹背の相語
臙夜の月影



第六回 柴の戸の燈火
迷路の片袖

第七回 山寺の門碑
菅根の私雨

第八回 鈴鹿の夜嵐
松が根の放鳥

第九回 狩倉の往交
想思の離別

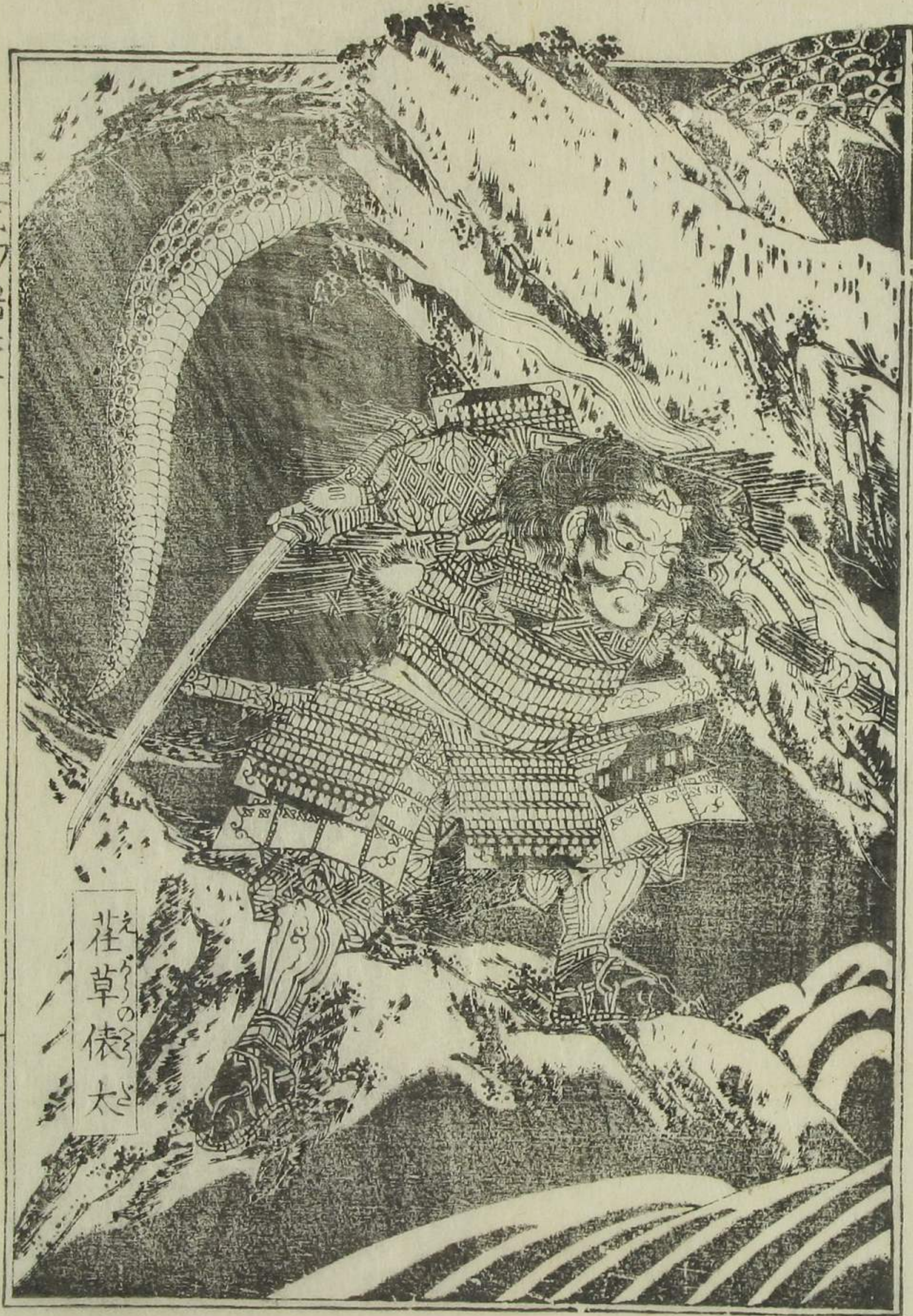
第十回 靈棚の遺文
乞児の怪力

通計十回總目次畢





和田平太龍長



荏草の依太

孝順篤行

遂青雲志

獸卿

北条泰時從臣

英多巴次郎

縣令
微塵忽平



経のふれ草
とくらの志は遠くはあ
まへんは誠なり

小に賤の
いと女
儀

悪法師 蟠龍



小碓の怨鬼



蛇欲化龍

先階尺木

騰雲升天

長三百六

寸

はしりたつ

くらたつ

ぬけてゆく

千代例

玉衣の
柄



嫩髻蛇物語卷之一



第一回

奥庭の賭弓

神垣の正夢

江戸

全亭主人戲編

人皇八十三代土御門院の御宇。鎌倉將軍頼家公伊豆国奥野の御狩せさせしむひけるふ。伊東が奇ふ大なる洞穴あり。其深いくをくむ。計せぐらんえけるむ。將軍怪しむ。和田平太胤長ふ命いひけ。胤長畏きて。郎等在草の表太とのへる者ふ。松明を照さぬ。洞中へ入りて。年経る巨蛇と斬る。大將軍の御感ふ預る。頃ハ

建仁三年五月朔日成けり。爰小胤長が正室有る麻機と云ふ日
夫胤長將軍の御供あり。御狩場立出まはる。甚はまてける
依ふ。その夜自が室の獨燈臺と挑げ物の本らどうち開き居
よりけるが。又小磯と呼ぶ妻あり。容貌いと美し。殊更絲竹の
道妙ありけり。胤長節々情と保り。側室麻機は元來是を
知。この人も。甚貞實有る。性質も。更嫉妬の念も。尚哀
憐と懸うければ。小磯ハ猶更よめ申ふ意裏に仕へけるが。今夜ハ
殿の在る。バ世の善悪ごとかどお詔しひ。其みろろと意遣んと。
正室の房小磯ハ到り。和ら紙門と引開き。中の光景と伺へ。今
麻機が物の本と見え在る室の天井より。丈尺あまのりある。蛇

菊燈臺と傳へ降し。項とのしげく額ののり。紋行と見え。か
まろくと。頰ふ口ほど這入ける。さほど麻機ハ何氣も居る。光
景と不審声とぞんと。あまのりの更の怖しと。声ぶ
出だま居る。麻機小磯と見え打咲今夜といふ寂莫を。な
汝が訪ふとを待つると。いひあうと。ひーが卒介。面の氣色変り。
額髪逆ざると。肉背さけ。面の色ハ朱と灌し。鬼女ハ等。形勢
ゆ。頰小磯ハ飛係り。丈る髪と掌ハ捲つ。拳と固め。續け
うらふ。轆轤を聲と勃誇。て。日比妬し。といひ。女はうそ。生置く
べ。在ひ駭き。頭小磯ハ。怖し。命も絶る事ある。
免しく給。といひつ。悪く叫び。物音ハ婢等。何るや。んと。

是ても麻機の意出目事変ず。ゆと頑る性質とあり。節々小
 磯がう人といひて。夫平太を怒すまとも。従来猛き胤長も更
 意不係されども。ゆたろり貞實ある意の是るのあら正しくも。彼御
 狩場の洞の中を。殿の武勇害せしむ。巨蛇が勾當るを。と
 婢女等の皆のひのけむ。斯く其年も暮る。同四年の春とありぬ。
 例年正月十八日と。九重不於て。天子弓場殿の臨幸ありて。賭弓と
 御覽する日。胤長が家も。何も正月十八日と。射初と。と
 度不期と築き。的を懸く。一門の人々とも。呼迎へ又其が術ある。従者
 等とも。同ト席不集ひ居さく。射術の會を。と。され。今年も
 け。社年人々等。朝ま。胤長が庭。會ひ。終日射術て。

其勝負とぞ競ひける。既未の下列亭。玉胤長立出く。いと自由一
 矢仕まろめと。黒き緋の衣。之引の紋縫。と著。綾織の羽
 崩と。菱の形織入る。袴の端。少抹く。村重藤の弓。小練白の矢。二
 筋と持。庭上。打番。と。狙と堅。切て放つぬ。
 手熟と。胤長が射。夫あれど。大遊。も
 女方の性飛。妻麻機が室。飛入。明障子。と射貫。母家の柱。不
 意。麻機。唯何氣。坐。居。不意。件。遊。矢。の
 飛来。耳根。と摺。驚。喚。と叫。びて
 正躰。倒。臥。麻機。口。中。一。道。の。白。氣。忽。然。と。昇。り。て。
 閨房。の。簾。子。と。洩。れ。婢。女。等。の。中。の。雲。氣。の。中。の。蛇。の。形。り。

〇現々と目の遮る消失ぬ正是諺云るか如く、殃と徳の勝事與
 ぬ。彼胤長が武威の碎る。巨蛇の念の雲霧の紛ひく。何地ぞ走
 散けん。儲胤長と始めし。庭の會ひ一人々等の驚き騷ぎ。彼室の
 我もくと走へり。妻麻機ハ倒臥。婢女等の取携。呼び
 活せし麻機ハ目と視ひ。吾身ハ更お過お。必駭。あ
 めひそとのひくその伏眠りける。高軒しく打臥ぬれ。各々やうく意落
 春く。儲も危なき。うら悦ぶ胤長は。人々例の如く。其
 勝負の坐と定めん。此方へ入りて坐し。各々のやうく。さへ
 まで其中ゆえ。後を取らん。面と赤り。勝と取らん。勇と。手並小
 下りて上下の列と正して坐し。今日の手並の第一胤長が従者

ありける。俵太が術ぞ勝てる。渠が射し矢の甲矢も。懸る。的
 の真只中と射貫る。渠と。一の上坐と定めり。二番ハ流石
 和田殿の三男。朝夷の義秀。あそ坐し。三番ハ是鎌倉
 小武勇も人免され。泉小次郎親衡。其より手柄の次弟。仍く
 主君の上坐。著く従者。子の下の坐。其父の晦氣。げ坐する。も
 わり。今日の主が御食忘。げ武士の晴。り。そ。颯々。死合。て酒宴。ハ
 漸々。その夜初。父の比。及。各々。吾家。不。歸。り。彼胤長。が。賭。弓。の。術
 と正。あ。擧。社。と。今。の。世。ま。でも。賞。翫。して。和。田。宴。と。呼。ぶ。斯。て
 ま。胤。長。が。妻。麻。機。ハ。夢。の。覚。る。その。病。も。全。く。愈。す
 公。も。昔。か。返。す。胤。長。と。始。め。し。従。者。了。頭。至。る。まで。皆。噂。さ。す

悦び合けり。まれば一日の妻の麻機夫に向ひひけり。今更慮ひ願
 見まほ小磯がうへも不便あり。面臥る業るがう。いざそのうへも渠が
 身をも再び此方呼戻し。渠が公を息めあぐしといふを。胤長は
 とせむ。其の理とわらふども。渠が光景と人々の風お知り。うへ
 と。自の一個の武士と人呼る。胤長が妾お公迷ひ。その妖孽ハ
 肩より。と沙汰せしきんと面目あり。まじその依捨置と人の
 口端の過と後成さんまを有ぶ。とひく。中々承引れ。麻
 機切ふとけれども。詮方なく。過行なり。且説爰又彼胤長が隨
 ひ。荏柄の俵太ハ其明年の秋の比及さる願望の夏あり。同国筈
 根権現お詣り。彼社檀寄。通夜あり。在けるが夜半時分と爰
 根権現お詣り。彼社檀寄。通夜あり。在けるが夜半時分と爰

比及外面の人音して。遽々拜殿の樞を音信のあり。内より誰
 るらん。何莫とと答へる。その者のい。是も出雲の御社。と参
 まる者あり。今夜亥の刻當国荏草の郷る。俵太が許お男子出生
 あり。命ハ七歳お限まり。其の何の禍あり。果ねと問ふ。これ
 を是より七年を経く五月朔日との日お伊豆の国伊東が崎る。巨蛇
 の食と成べしといひて公けり。俵太ハ吾身の事とも知て現心お其言を
 せ居る。俵太といふ。いさ。あうち驚き。眼を見開き社の内のりを
 見たり。これ。更お人影お無け。最の中。夜の明る。涙遅し。と待つ。爰
 を吾妻懐妊あり。然も今月出生の當月あり。心お懸りて。まじ
 殿ごのり。箱根権現の御社と。喘息つ。吾家お帰。これ。宿

昨夜平産のりく。殊更男子ありとて。皆々悦びのひぬれど。俵太も
 現ふや。夏の符合ありて。怪み。心悅む。漸日と経ると。又
 呼名をも付ざりけむ。妻ハ夫の様子と不審問ける。君今四十
 及びひて。もらて一子と儲けぬ。殊更男子あり。定めり。悦びぬ
 へ。と。の。外。さる。こ。け。い。さ。も。ん。え。ぬ。も。童。が。名。と。ど。何。と。も。名。付。ぬ
 ら。い。う。も。御。意。ゆる。信。ら。ん。と。数。く。せ。ぬ。れ。ど。も。俵。太。ハ。唯。自。意。不。信。の
 る。の。れ。ば。そ。の。依。不。捨。置。べ。い。年。経。く。後。そ。の。意。ハ。知。る。べ。い。と。の。と。答。て。
 其。と。明。ふ。言。さ。り。け。れ。ば。妻。と。不。審。と。慮。へ。と。詮。方。か。く。只。そ。の。依。不。過。太
 けり。俵太熟々憶ふ。斯る夏の世のゆるごとく。考へん。先年。伊豆国伊東が奇ふも。主君大蛇と斬ぬ。刻僕徒ひ。先

公る建仁三年五月朔日成けり。童が性命も今日より又七歳過て
 五月朔日大蛇が食ふ所も違はず。彼所於て亡ふと。正しく件の
 大蛇ハ陰陽の二尾あり。前ハ主君の斬ぬ。陰陽ハ何なる分
 ぬ。右まれ左よと。残る蛇の吾子は。執念のゆるん。其の
 吾子の命數も右の上にも。かる言をせ。何虫類の其為ハ無差々々
 吾子と。僕も一個の武士あり。年月を待付く。伊東が奇ふ牽て
 往く。其性命と様。と。心。ひ。ろ。慮。ハ。究。め。時。節。と。テ。待。て。け。む。
 斯く月日ハ閑守あり。疾七年の星霜を経く。永元四年の夏五月朔日ハ
 近づく。皆も俵太の前日の早朝より装ふ。妻ハ今日。空工の
 晴る。童と率く。小鳥狩と遊ん。弓矢携へ。吾家と立出

童を負ひく道を開き。伊豆の国ある伊東が奇の明日の午刻に着き。
 昔入りの洞穴の近づき寄て吾兒と率連。回の方を只見れば件の洞
 大木の榎の軀を纏ひつは。瘻の如きの項とて。童を目がみく矢を吹
 ぬ。既の斯うく見えうけ。童はうめんと哭せ。空の向の中は俵太を
 自疾く。弓矢と番ひ立。計り引絞す。大蛇が項と的とす。切て放す
 過く。大蛇が頭の只中より。軀を懸く二三寸鐵を頭へ射せし。空
 件の榎の倒るなり。噪々と響渡す。砂煙を捲き。空の窟を空中
 血の雨降して狂ひま。暫ハ空の登るうと見え。俵太の透り在
 せ。二の矢と番ひく上を率の祖と堅め。兵と放つ手忘し。共

踰躑土烟の中より。弊まき。礎々と地響き。うろく。落しうけを俵太
 只の先年。主君の斬りと。大蛇より。小ハ夫の短くも。その其が
 雌あべ。斯く俵太の件の軀の側へ。公の撥捨す。吾兒と。朱の
 あり。傍の倒まき。臥し。生血の流る。
 押試ひ。大蛇が生血の流る。中ハ臥り在。故斯
 深ま。童が。過も無。吾子と。背負ひ。家路とさ
 歸り。勇々。妻ハ夫の歸り遅。童が
 待侘。夕暮。親子を。家ハ返りけ。日を重ねる
 小鳥狩。得物の遅かり。と。同ハ。俵太。弓矢。置き。大なる
 七歳前夜。箱根の社。通夜。彼。話説。家ハ歸る

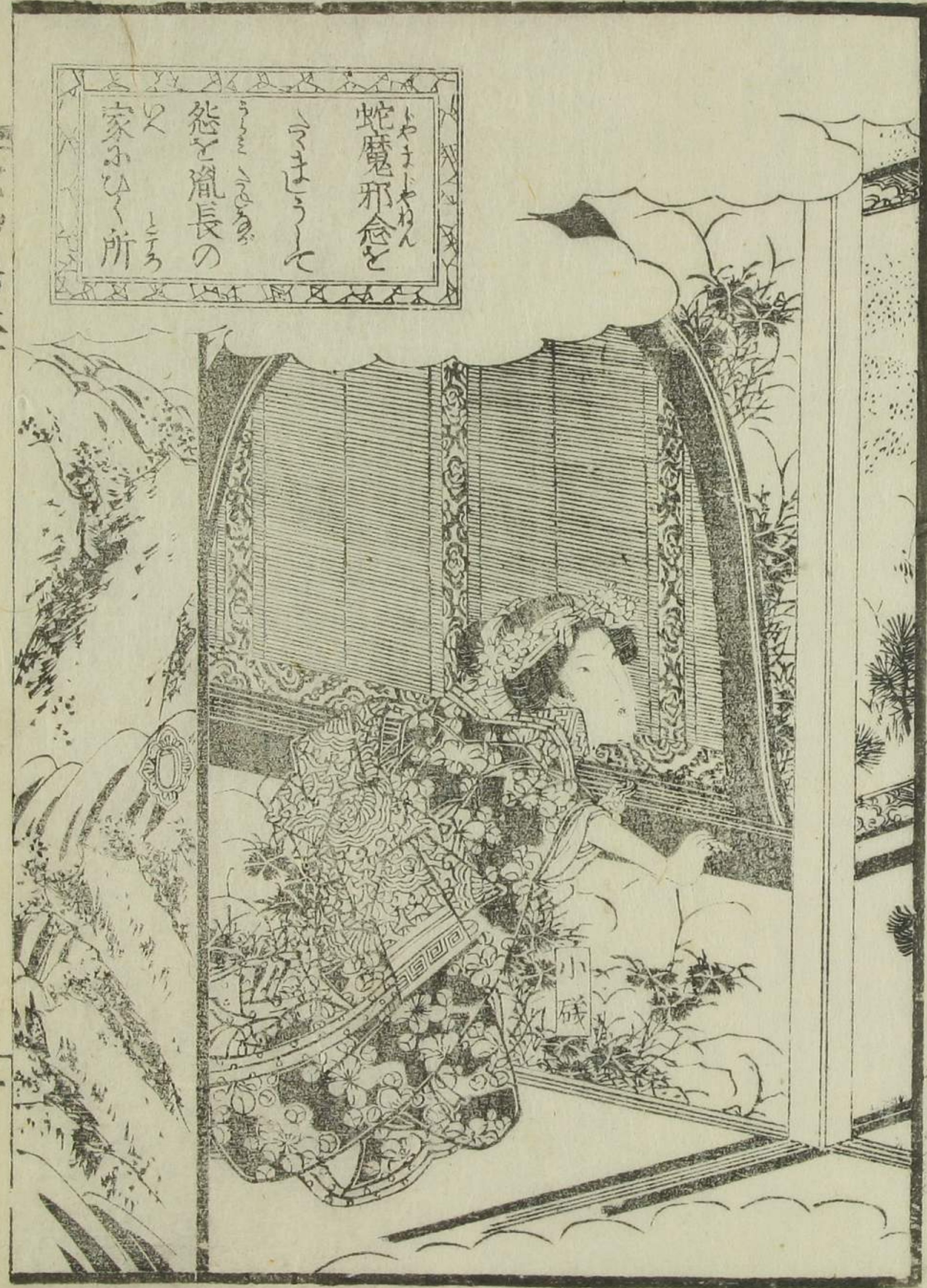
事問へ心みかる男子の出生斯く語らるるも号名も号を捨置
 其日の様子を様さん為今こそ執念と亡ひれば公みかる雲霧
 吾見の行未憑母一と始終の様子を話説まは始めく妻を
 或ハ驚き又ハ怪く夫の勇氣を感じけり是く俵太六年
 來の憶念を担ひ且二子が災ひの根を断る心磐石の思ひを
 大悦び是より七年の厄難を寛るるの意を以て童名を寛七
 呼びく其愛之育けり斯く月日歳之如く巡りて寛七速十三歳
 成ぬれば俵太ハ寛七ハ商人の活業せさせんとす鎌倉の郷ある藥店
 張六と呼ぶ者の許不遣く賈人の活業を倣せける免七從來貞実
 なる性質ありけり亭主張六も二ある者ありて遣ひ免七十六歳

ありぬる比ハ元版ありく。年齢一十代等の中増ゆる萬のるを
 扱はける。

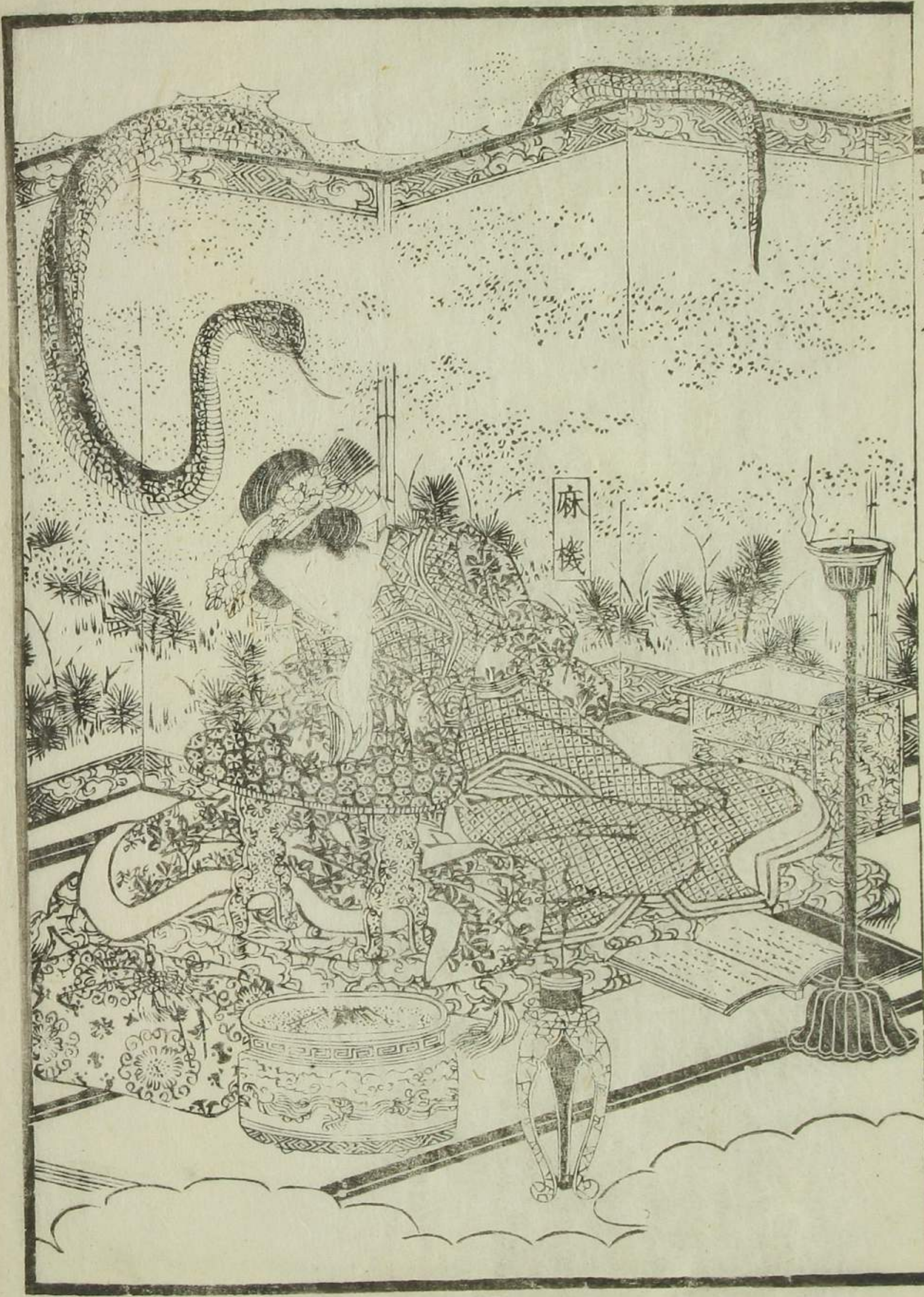
或人評しく曰怪力乱神と語らむと人ども。偶奇説と説を。
 衆人耳を敲く聞る。世の風俗あり禽獸蟲豸の類争人ハ
 怨念る及事の謂有ん。況や託宣ハおのくとも。悉皆己が心より
 招くの禍有り。彼俵太主君胤長の洞中ハ大蛇を斬ると思
 出く。箱根の一睡ハ執念と發し。斯る夢を結びく一度迷ひの
 雲ハ覆はると人ども己が勇氣ハよけて禍と様一とく。
 ありて竟ハ迷ひを解くハ至る是流石ハ武の功と謂つ

あり

蛇魔邪念を
 うまはらうて
 怨と嵐長の
 家ふひく所



蛇物記卷一



麻機

九

第二回 古郷の佐ひ住 雪夜の迷ひ見

話説其頃天下の政道の總々尼將軍の計らひより出る。依怙の沙汰
 の多々。殊更奸姦の北条時政父子。權を執り既世を奪ふの萌顯を
 けま。建曆年間忠義の武士等と惡み。各相商議。渠等
 父子と失ひんと謀りける。却々佞惡の爲に捕はる。各罪せしむ。流
 長元來忠義の志深かりけま。共小荷擔く。竟に建曆二年陸奥國
 磐瀨郡に配流せしむ。程々配所到着ぬると等く。胤長を
 腹搔切てぞ失ふける。鎌倉三代記見聞志等且説彼依太ハ斯ク一ハ
 主君と共に隨ひ往ふんと思ふ。胤長といはれける。因襲に乗せしむ。

人々圍まれ到りぬ。依太ハ是より太刀帶く業を捨て同國なる
 まで忍び。到り彼如小者けま。速主君ハ自殺しぬ。とて泣
 亡骸と申給り。甚念頃吊ひり。つ。諸鎌倉小歸りける。主君
 も是亡びぬ。吾人とも思ひ願ふ。げハ武士の身やど公
 苦。此のハあつと。依太ハ是より太刀帶く業を捨て同國なる
 六浦の郷といふ処に到り。此処に田圃を需り其身土民となり。親子
 三人して住し。流石ハ武士の果るべし。郷人も敬ひ。話分
 而頭。爰又往時元久の年間彼胤長ハ妻麻機ハ嫉妬小寄。妾小
 儀ハ親里に立歸り。住し。父ハ昔死す。母の片瀨といふ。も
 憂と凌ぎ。在ける。思へ。鎌倉を別る。節ハ吾君の消息

まるゝのど人故せんす入るゝ言絶く詫しよと増すゆ。こも身も
 常の効るゝバ公細く世の中のり不成也く支中んと今日よ翌よ
 と過せし頃月満時ありて其霜月の初はるゝ王のやうなる男子と
 心易く産るひりい磯ハ斯なる悲き中もの悦ばれたともの物も
 鎌倉ゆく産まると和田の人々會ひぬひくと賑うく在さんふさ
 産るゝ果報つゝるた此子やと取乱し泣叫ぶと片瀬も公慰めく
 げふ理とるせりの男子ゆも在るれば世おんるもの有べしととを吾
 兄が健ふ生育しそハ憑られと言扱ひく育は日と重ねが稚児の男子
 るゝ女見とふしてるゝ育てこと宜ひつれば斯せんと思より婦の打

扮すゝ名とも垂氷と呼びけく愛も育けり斯く月日ハ閑守をく
 時本星移りゆたゝ垂氷が七歳成ぬ兼元四年の冬の始はるゝより
 小磯ハ不圖風邪の公地ま打臥すゝ日と重ね疫病とありて悩るゝ
 此程ハ朝夕の食事ゝおまゝ兼ぬれ片瀬ハいゝ覚束あるゝ斯る山
 家かゝる醫師ちと尋需めく種々お扱ひぬまどその験ゝ無やた垂氷ハ
 近曾より文く業と習はせんゝ山寺お登せけま朝夕其処お往
 通のりー折しも帰来く母が枕方お寄添は病める面と打護も少
 きふして母が背を撫さるゝ涙ぐらひひけり母さる今日もいふ半ら
 食を喰給ひけんといはぬ母といと細き声くけや殊更お胸の苦しけ
 まるゝ食と喰さるゝ汝ハいゝ帰来つゝる未ゆも成ぬべしとを

飢つゝ。今日何日より遅かり。老母さる不仕え。速昼飯之くゝのへを
 垂氷せり。母さるの給ぬぬ。吾身の喰べ。とも見え。や吾
 身ハ左右も唯母さるの何日や。斯をり食を喰ぬ。過ぬ。果ハ
 成ぬ。母ハ哀。母の袂取携。最か。こ
 て。童ハ入。鎌倉。高き武士。其父上。顔。知
 ら。産。其。父。呵。宣。其。所。謂。
 公置。退。尚。面。白。追。騁。の。憂。女。と。れ。後
 更。母。様。力。必。男子。打。交。鬼。遊。背。戸。生。
 栗。柿。の。樹。上。長。悪。遊。母。食。喰。ひ。て

病愈。健。成。れ。双。の。袖。と。顔。の。で。嘆。げ。動。く。童
 髪。凡。の。種。徒。造。り。菊。の。并。も。散。く。涙。の。白。露。と。置。ハ。千。年。の。木
 ま。母。の。齡。と。暮。る。真。心。と。そ。お。ほ。れ。小。磯。と。斯。も。稚。き。の。
 母。と。胸。も。張。さ。り。牙。の。苦。も。打。忘。坐。行
 出。取。携。共。涙。哽。え。片。瀬。も。俱。寄。添。ひ。六。の。袂。と。絞。り。け。り。
 斯。其。日。も。暮。行。ぬ。垂。氷。ハ。母。の。枕。方。添。居。て。背。と。撫。さ。り。居
 小。磯。も。勞。め。睡。々。と。寐。る。様。子。と。垂。氷。ハ。牙。と。静。々。と。臥。床。を
 退。き。和。ら。ま。出。門。の。戸。の。多。び。引。開。く。何。所。と。う。て。出。行。ぬ。老。母
 片。瀬。ハ。折。々。厨。在。病。者。の。藥。と。煎。ト。居。り。老。の。耳。も。物。も
 どの。知。を。丁。度。藥。の。程。と。器。も。汲。く。お。ま。ま。小。磯。目。寤。り。起。直。り

垂氷ハ何處いづこも至いたりしと問とへば片瀬かたせも公こう付つく左見ひだりみ右見みぎみして尋たずねれどさ
 せる隈かたる死し庵いん室むろあり何處いづこと需もとめん方かたもろく隣となりとのも遠とほる便べんの如ごとく
 ぬ山中やまのちうか見み束たばるも呼よ子こ鳥とり親子おやこ額かぶと合あはせり案あんト惑まどひく待まち折ひり
 遠寺とほのてらの鐘かねも二ふた交まじりあはる花はなより愛あはる稚見こゝろみの門かど音信ねづきく歸かへり来きぬ片瀬
 と其処そこお轉まひ出でかる寒さむさふ夜更よまた遂まは執と書しぬ夜遊よあそび何所いづことどうと到いたり
 ぞぞ猪狼ぶろうの懼おそしと牙まがふ懸かるひつとせん圍爐ゐろふ凡木つぎふ打うて之これ冷寒ひえさむえ
 づるも取とりぬ燭あかりづる問とひしと垂氷つらみハ稚こさ公こうの斯こゝろまぐ吾身われみと惠めぐま
 るしと不慮ふり涙なみだぐと斯母おははと祖母おばあとの案あんトゆふと露つゆ知しるでけの手
 習ならひの道みちまぐ東隣ひがしの友ともとの雙ふた六む打うて遊あそぶと今夜こんやの約束やくそくしゆ
 一ひと其そのが競きひの面おもて白しろさふ遂つひ夜よの更あけくゆりしと答こたへし己おのが真ま心こころも親おやと

謀はかる空言そらごとと空懼そらおそしく吹風あきかぜハ吹ふ緩ゆるらましく苗たねの根ねも合あいで身み中ちうの
 震ふるまじつ言いへば二人ふたりと不審ふしんと思おもひあはるも小碇こいそハ重おもき枕まくらどりのびて
 斯こゝろまを病母やまははが身みと稚こさるぐ打捨うちまて夜遊よあそびせらる公こうの死し吾子われこなる
 うと死しむれば垂氷つらみハ何いづと吾われ合あはさるもあはるバ猶なほ豫よ不定ふじやうく稚心こゝろハ思おも
 ひ侘わ哀あれ忍しのびく泣なむ出でた公こうの中ちうやゆるるん頃ころも十月じふがつ始はじつと光あり明ある
 朝あす夜明よあけより空そらより雪ゆきと催もよほしとちりちりと降ふり其その黄昏わがくれと降ふり
 滋しで尚なほ弥や増まる降ふり門かどの柳やなぎハ老女らうにやと化けり庭にわより松まつと病やまと變かへ
 折ひり軒端のきばの竹たけハ雪ゆきハ折ひれ何いづと何いづと言いふとも見みの氷こほりハ口くちと閉して更さら
 お黙もく然ぜんたり親子おやこ三人ふたりと殊こと更さらハ寒さむさ屈かむ山住居やまぢやう夜よと尚なほゆる寒さむ
 渡わたり燃もゆるや火かと力ちからとあし病やまハ尚なほ更さら寒氣さむかぜのや身みハ障さやらんかと遺のこす

垂水ハ傍ノ埋火と搔る〜母ガ裾ハ添く自も諸この在るんえ
 くるまきの衣の裾と抜出く。何處と〜至るん今夜も其処おんえ
 ぐま六親子目覚く打驚き片瀬ハいゝ不審く。門の樞と押開け夜
 風烈しく吹込る吹雪ハ声も畏宜著公ものてヨ率ぬハ背戸屋ハ
 到ま六推つ〜薪のうハ打掛ハ〜垂水ハ缺掖衣〜懸る
 付幻の風ハ纏く降ま〜雪ハあハ足跡と付く何処ハ往〜
 わ〜〜片瀬と〜胸裏ハ斯る吹雪ハ著る衣ハ
 脱く何処ハ走往〜垂水ハ公の不審と暫思案ハ聞〜
 出〜事〜過〜日〜朝〜疾起出つ足柄の方ハ向〜
 と合せ願事〜と余所〜風ハ吹けハ母人の病愈〜賜へ

と口蕃〜と自ハ老の耳〜小碓ガ語る伝〜
 涙ハ哽び〜偕と昨夜の夜遊〜
 祈〜裸参詣の願事〜今夜の此雪ハ稚〜夜更
 野路ハ山路と只一人越〜往身ハ神〜雪ハ寒え〜死〜
 猪狼ハ喰ま〜老の〜忘〜孫と案〜
 足止め〜究〜門ハ入〜ガ〜明白ハ此様子と娘小碓ハ
 せ〜稚〜思〜遣〜重〜病ハ障〜独〜枕〜
 垂水ハ今夜も抜出〜東隣の友達ハ遊〜
 び〜稚〜彼處ハ一〜自迎〜往〜
 門邊〜公ハ跡ハ残〜病ハ娘ハ氣遣〜斯〜山家ハ

殊更ことごと雪ゆき追おまま猪あぶら核たねのまりのせんうと往ゆ道ちもゆ雪ゆき紛まひて跡あと先まも
 未ま辨まへぬ稚わ児このあ足あ跡あとよりの外あ又またあるべいふあき遠と近ちのの野の路ちもの山やま路ち
 もの押お多おくも唯ただ一ひと面めんのの白しろ妙まふも新あらたなるの人ひと山やま賤せんのの跡あといふんをぬを夜よのの雪ゆきいふ
 降ふるの六むのの花はな六むのの岐まめめ呻う吟いんるの心こ地ちせきまく七なな歳さい児こをを尋たづ行ゆ身みをを七
 十じゅう年ねんのの頭あたまのの雪ゆきもも跡あと増あふるもも厭いとむるをを弱よ々々とと撓たがめる腰こしもも竹たけ杖えのの力ちからをを
 尋たづ行ゆ正ただ是し彼か稚わ児こ垂た氷こがが行ゆ衛ゑ何なにもも所ところもも至いたるる其そのとと次つぎのの卷まの
 説せ分ぶん

嫩髮蛇物語卷之一終

